

ラボビアンモデルによる 日本語のナラティブ分析の可能性と諸問題

小玉 安恵

〔キーワード〕 ラボビアンモデル、ナラティブ分析、ナラティブ節、オリエンテーション、評価

〔目次〕

はじめに

1. ラボビアンモデルをめぐる論議

1.1 全体的な構造

1.2 節構造

2. 日本語ナラティブへの応用における事前の対応

3. 分析結果

4. 結論とまとめ

おわりに

はじめに

我々は、日常会話において、自分の経験談を話題にすることが多い。そうした経験談は、文が統語的に構造を持つように、物語（ナラティブ）としてある一定の構造を持っていると考えられている。変異分析の創始者である Labov は、そのナラティブの構造分析の枠組みとしてラボビアンモデルを提示した（Labov and Waletzky 1967, Labov 1972）。このモデルは、研究者間で論議を呼び、現在にいたるまで、様々な改訂とその応用が試みられ続けている。このモデル自身の問題や言語の違いから、日本語のナラティブへの適用は、ほとんどなされていないが、スペイン語やフランス語ではなされており（Silvia-Corvalan 1983, Fleischman 1990）、今後、談話レベルでの構造の比較が言語間でなされる際に、有用ではないかと思われる。本論では、このモデルをめぐる様々な論議を紹介した上で、最新の Fleischman(1990)のモデルの日本語ナラティブへの応用を試み、その際に起こる問題点を明らかにして行きたいと思う。

1. ラボビアンモデルをめぐる論議

1.1 全体的な構造

Labov (1972) は、ナラティブは「過去の経験を要約して述べる一つの方法」であり、構造的には、「一連の言葉上の節が実際に起こった一連の出来事に相当する」と考えた。そこで、彼は、話の全体を以下のような六つの部分に分けた。それらは、話の概要部分 (abstract)、出来事の方角付けの部分 (orientation、以後オリエンテーション)、実際に起こった一連の出来事の部分 (complication、あるいは complicating action、以後、コンプリケーション)、出来事の評価の部分 (evaluation)、出来事の結末部 (resolution)、話の終結部 (coda) である。この中で、概要部分と終結部は、話によってはないこともあるが、オリエンテーションとコンプリケーションと評価の部分はなくてはならないものとされている。

まず、概要部分は、話し手が聞き手のためにする短い話の要約である。

次に、オリエンテーションの部分では、一般的に、登場人物や場所や時間、その場の状況などが紹介、説明される。Labov は、この部分は、必ずしもナラティブの冒頭部分に起こるとは限らず、節構造で後に説明するナラティブ節自体に語句として埋め込まれるケースや、その他の部分にも起こる可能性を示唆している。現時点では、Schiffrin (1981) により、オリエンテーションがコンプリケーション部分に埋め込まれることで、近隣のナラティブ節を理解するために必要な背景情報を供給したり、さらには、ナラティブ節の情報の相対的な価値を知らせる評価的な機能を果たしたりすることが分かっている。また、Fleischman (1990) は、コンプリケーション部分だけでなく、評価や結末部分にもオリエンテーションが埋め込まれていることを明らかにしている。

コンプリケーション部分と結末部分は、通常、後に詳説するナラティブ節より成り、コンプリケーション部分は結末部分によって、その終わりを告げられる。これらの部分は、実際に、一連の出来事が前に動き出すところである。また、オリエンテーションや評価の節も、この部分に起こることが明らかにされている (Schiffrin 1981、Fleischman 1990)。

一方、ナラティブの終結部は、話全体の終結を告げる部分である。というのも、ナラティブ自体は、過去の時点の経験であって、話をしている時点との接点がないことが多いため、話をしている現在の時点に戻るきっかけが必要なためである。Labov らによれば、終結部分によく観察されるのは、指示詞 (例、“That was it”) や、ナラティブの登場人物の現在の状況、話し手へのその事後の余波などの後日談である。

最後に、評価部分は、ナラティブ全体に散りばめられている。評価には、ナラティブの外からの評価 (external evaluation) と内からの評価 (internal evaluation) の二種類がある。まず、内からの評価はナラティブ節内において、音量やトーン、強調語彙、繰り返し、直接引用や強調構文や比較級等による強調、文のモード、否定等などによりなされる。一方、外からの評価では、話

話し手が一旦、話を前に進めるのを中止し、今まで語った、あるいは、これから語る出来事を評価するため、ナラティブ節外の節が新たに設けられる。内からの評価の記述はきりががないため、最近の研究のデータ分析の際に明示されている評価は、後者の外からの評価である場合が多いが、外からの評価、内からの評価いずれにしても、ある出来事に対する話し手の態度や感情をあらわすことによって、一連の出来事間に相対的な価値の差が生じ、聞き手が話のポイントを理解しやすくなるという点で一致している。

1.2 節構造

全体的な構造がナラティブのマクロ構造なのに対し、節構造は、そのマイクロ構造というべきものである。Labov and Waletzkyによれば、ナラティブの節構造は、ナラティブ節 (narrative clause) と等位節 (coordinated clause) と制限節 (restricted clause) と自由節 (free clause) の四つに分類されている。その中でも、ナラティブ節はナラティブの話の骨格を支えるもの(ミニナラティブ)として注目され、その定義は論議的になった。元々のLabovらの定義によれば、ナラティブ節は節同士、互いに時間的に重なりあわない、完結した出来事で、独立節で述べられる。それらは、一本の時間軸上にリレーのように起こった順番に並べられているため (primary sequences)、もしその述べられる順番が変わると事実までが変わってしまう、とされている。この定義には、時間的な規準 (起こった順番どおりか、互いに重なりあわないか、つまり、過去から話をしている時点に向かって→→→→のように進んでいくか)、言語学的規準 (独立節か)、置換規準 (移動不可能か) の三つの規準があり、互いに密接に結びついている。中でも、時間的な規準は、最も基本的なものであるが、様々な論議を呼んだ。まず、Dry (1981) は、時間的な規準がどのような言語的あるいは意味的現象に支えられているかを調査した。その結果、ナラティブ内の出来事が前に進んでいくという感覚は、明確な状態の変化に支えられるもので、それらは、個々の文の動詞の種類に負う場合と、文と文の論理的な関係に負う場合の両方があることを示した。そして、ナラティブの時間を押し進める動詞について、時間的に持続的で進行的な動詞よりも、一つ一つが完結した出来事を表す動詞 (achievement and accomplishment verbs) が話を前に進ませると指摘している。一方、文と文の意味的な関係に負う場合には、状態 (stative) や活動 (activity) の文であっても、明確な状況の変化やそれに伴う結果が含意されていたり、推測されれば、話が前へ進む感覚を与えられ、また、そのような場合、該当の文と近隣の文との関係が原因と結果の関係であったり、対照的だったり、該当の文が変化を表す副詞 (例、突然、急に) と共起したりすることが多い、という。一方、Reinhart (1984) とThompson (1987) は、Labovらの定義では、時間的な規準に合致する従属節 (例、完結性の高い動詞が使われている when、after、as soon as 節など) がその言語学的規準と置換規準ゆえに排除されることを指摘した。時間的な規準を最重視する Reinhartは、従属節はナラティブ節を後景化するための言語的手段にすぎず、話し手にとっ

ては技巧上の選択であるとしている。これに対して、Thompsonは、これらの従属節をナラティブ節と呼ぶことには躊躇しているが、ある一定の従属節が時間的な規準に沿っていることは実証した上で、従属節はナラティブの結束性や一連の出来事の続行性を高め、かつ単純になりやすいナラティブの構成に変化を持たせる効果を持つ、と結論付けている。現在では、従属節も時間的規準に合致すれば、ナラティブ節として認識されている (Fleischman 1990, Fludernik 1991)。また、ReinhartとThompsonは、Labovらがあげていない規準で80年代前半まで前景化の規準として主流であった「重要性の規準」(Hopper 1979)をナラティブ節の規準として考えることにも疑問を呈した。現在では、ナラティブ節であることと前景化されていることは別問題であるとされ、また、その元である前景化の規準でさえも重要性から離れつつある。さらに、もう一つ、見落とせない新たな規準として、Fleischmanのあげている構想展開上の規準 (plot development criterion)がある。Fleischmanによれば、この規準は普通、ナラティブ節として認知されることの少ない否定文で、話の筋の展開上欠かせない節に、ナラティブ節としての資格を与えるもので、それなくしては話の筋の論理が崩壊する否定文に限られているが、否定文だけには限らず、肯定の状態性の文などにも適用できるのではないかと考える。

次に、等位節は、時間的規準と置換規準に反する節であるが、Labovらにより制限節の要素も併せ持つナラティブ節の一種と考えられている。等位節は、いくつかの行為が実際にほとんど同時に起こることがあるために発生するもので、その順番を等位節間で換えても元の意味に影響がないのが特徴である。

ナラティブ節や等位節に比べて、制限節と自由節は、あまり論議されることのない節である。Labovらによると、制限節と自由節は両方とも時間的規準に当てはまらない節で、その置換の範囲において、ナラティブ全体の範囲で移動可能なものが自由節で、限られた範囲において移動可能なものが制限節である。これらを実際、試験的に移動させる場合には、指示詞 (anaphoric reference) などの変更が必要とされている (Labov and Waletzky 1967)。

Labovらのこれらの節についての描写は、上記のように三つの基準の範囲内でしかなされていないのに対して、これらの節がどのような情報を伝えるかということにまで触れているのがSchiffrin (1981)とFleischman (1990)である。これらの全体的な構造と節構造の関係を比較して紹介するため、次頁にまとめてみた。Schiffrinの場合、全体的な構造と同名の節構造を設定している点が特徴的であるが、データの分析をコンプリケーション部分にしぼっているため、コンプリケーション部分についてのみ、その構成要素である節構造に関する記述が見られる。しかし、Schiffrinも、話のはじめのオリエンテーションを、内容的には、時、場所、登場人物の紹介や既存の状態などの背景情報で、時間的にはナラティブ全体にかかることであり、述べる順番を互いの中で変えたり、ナラティブ内で位置を変えても、ナラティブ節の解釈は変わらないと説明していることから、Fleischmanと同様、自由節あるいは制限節からなることを想定していたのではな

いかと思われる。その他の研究では、全体的な構造と節構造が、別個に問題を抱え、その解決に終始してきた感が強いが、この二つの研究においては、その関連を積極的に明らかにしようとする動きが見られる。

Schiffrin's model (1981)

ABSTRACT

ORIENTATION ----- orientation clauses

COMPLICATION ----- complicating action clauses----narrative clauses, restricted clauses
----- embedded orientation clauses
----- external evaluation clauses

Fleischman's model(1990)

ABSTRACT

ORIENTATION ----- free clauses, restricted clauses

COMPLICATON ----- narrative clauses, restricted clauses
----- embedded orientation----free clauses, restricted clauses
----- embedded evaluation----free clauses, restricted clauses

RESOLUTION ----- narrative clauses、restricted clauses
----- embedded orientation----free clauses, restricted clauses
----- embedded evaluation----free clauses, restricted clauses

CODA ----- free clauses, restricted clauses
----- embedded orientation----free clauses, restricted clauses

2. 日本語ナラティブへの応用における事前の対応

日本語のナラティブ分析において、ラボビアンモデルがあまり用いられなかった理由には、大きく次の二つが考えられる。一つは、日本語と英語の言語の違いである。まず、修飾節や引用などの埋め込み文の位置が、日本語と英語では構造的に違う。節毎の分かち書きが求められるこのモデルにおいて、日本語のように埋め込み文が入ると、主文の主語と述語が離れてしまう言語は節番号が打ちにくい。また、様々な動詞の種類や従属節における様々な接続助詞がどのように節構造の分類に関わってくるのか、未知数である。その上、文末が曖昧な口語日本語において、どれを文末と認め、どれを認めないか、という基本的な問題もある。そこで、ここでは、データの分かち書きの段階で、これらの問題に対してどのような方策をとったかについて述べる。まず、埋め込み文は、節構造には加えず、主文の主語と述語を一つの節として数えることとした。

Fleischmanでは、引用文は一つの節としては認められておらず、引用句（例、He says）がないときのみ、代わりに節番号が打たれるが、関係代名詞を使った修飾節は、一つの節として分かち書きされている。日本語においても、引用句が見当たらない場合は、Fleischmanと同様の措置を取るが、修飾節については、同じ埋め込み文として引用文と同様、単独の節構造としては認めないことにした。その方が、埋め込み文と主文の関係として公平な扱いであり、分かち書きの便宜上も日本語の場合よいと判断した^(注1)。次に、動詞と接続助詞の問題は、データに出てくる範囲内で日本語での分類とDryやFleischmanの分類と照らし合わせつつ、個々に考えて行く。最後の、文末の問題に対しては、意味のつながり方や音声データの利点を生かしてポーズやイントネーションの分析も加えることで、文末としての役割を果たしていると総合的に判断できるものは、終助詞や動詞の終止形に限らず、動詞のテ形や連用形、接続助詞、名詞止めなども文末として認めた。

もう一つの問題は、Szatrowsky (1985) において指摘されているように、どのような種類の節か（ナラティブ節か否か）という判断は人によって違うのではないかという疑問である。しかしながら、最も主観性の高かった重要性の規準が否定され、Labovらがあげた規準にも改訂が加えられた上、新しい規準も設けられた現在、その有用性を試される時期に来ているのではないかと思う。むしろ、重要なことは、その際に節の種類認定に戸惑ったものについて、それを分析結果として詳細に記述することであると考える。

なお、今回の分析では、Fludernick (1991) により、口語ナラティブの場合、繰り返しや従属節化などの統語的な手段よりも、テンポ、音量、ポーズなどの韻律的な特徴によってナラティブ内の情報の前景化が示されることが指摘されているのでその韻律的な特徴の記述も試みた。

3. 分析結果

データは、「ごきげんよう」というテレビ番組からとった。以下の体験談は、与えられた課題（例、恥ずかしい話、怖い話）に沿って、女性ゲストにより話されたものである。

凡例：1～51＝節番号、a～z＝ナラティブ節、下線＝強調、@@@＝笑い、[]＝聞き手との対話、
 。＝文末のポーズ、、＝文末以外のポーズ（マークの数は長さに比例）、
 ×＝聞き取り不可能箇所、↑＝テンポアップ、↓＝テンポダウン

分析サンプル1：ネコかぶり

話し手		聞き手
1 あのね、うちも一匹ねこがいるのよ。	ORI	(ネコの鳴きまね)
2 ニャータって言って、		
3 もう15になるんだけど。 そいで、その、あーん (聞き手のちょっかいに対して)		(ネコの鳴きまね) @@@@@
4 そいで、あのーうちの子がかわいがってんの、とってまね。		
5a そいで、もうある時ね、あのうちの子がね、 「あんまりこいつがかわいいから、 こいつがいなくなった時のことをね、 あのーたえられないから、 その前に、子猫を飼って、 あのーかわいがって、 それを育てて、 こいつがいなくなっても、 そのー寂しさに耐えられるように 衝撃に耐えられるように 子猫を飼いたい」 って言い出したの、うちの子が。	COMPLICATION	うん
6 ほしたらね、ある時、私が寝てたら、	EMBEDDED ORI	
7b 子供が部屋にとんとんって入ってきて		
8c 「ニャータが大変なの」って言うのね。		うん。
9d そしたら、「この猫はもう白内障で年取って目がほとんど 見えなくて言われた」って言うの。 ニャータが。 うん。		[ニャータがですか。 ニャータが。]
10e ほいで、よくニャータの顔をこう見たら、		
11 こんなかわいい顔してるんだけど、	EMBEDDED ORI	
12f 目がバーッって開いたっきり、 (発見した どう孔が開きっぱなしなのよ。) 内容)		あー。
ほいで、あんまりのことにうちの子ね、	↑	
13 ニャータの目が見えなくなったら、	↑	EMBEDDED ORI
14g そいでもうちっちゃい猫のこと忘れて、	↑	(coordinated)
15h 「もうあれはいらないわ」って「ニャータを可愛がるわ」って言って。↑ clauses)		
16i お医者さんにも相談したら、↓		
17j あの、ちっちゃい猫を飼うと、 年とった猫って僻んだりすねたり嫉妬したりしてね、 大変なことになるんですって。。。 いなくなっちゃったりするんだって。		あー はいはいはいはい そうですね。

18k だから、「もうちっちゃい猫のことあきらめるわ」って言ったの。

19l と、しばらくしたら、ニャータのどう孔がニョーっと狭くなって、RESOLUTION

20m もう全然、一階から三階までバーツってかけおりにて、(coordinated

21n がけ、下ったりなんかしてるの。

clauses)

へーわかったんですかね。。

22 ねこかぶってたの。

↓

EVALUTION

えっ、えー@@@@@@@@@

このデータの場合、1～4で登場人物（動物）である猫の描写と娘との関係が最初に描かれており、典型的なオリエンテーションではじまっている。そして、実際の出来事は5から始まる。

まず、問題となったのは、6の分類である。6は、状态的で、時間的には多少7に重なりながら7に先行しているので、節の種類は制限節である。しかも、6が必ず物語の進行上、絶対的に必要な節かという展開上の規準から考えると、そうではなく、背景的な情報であるので、ここでは、コンプリケーション内の埋め込みのオリエンテーションと考えるのが妥当であろう。次いで、7、8、9とナラティブ節が続く。その後、10でタラ節がくる。タラ節はこの2つのサンプルデータにおいて、テ形接続（18例）について頻繁に現れる重要な構造である（9例）。この10のタラ節は、日本語教育において「発見のタラ」と呼ばれているもので、この「発見のタラ」には、タラ節中の行為の遂行の結果、次に続く節で、ある状態の発見がなされるという意味の構造がある。また、その発見される状態は、ナラティブの鍵となる重要な状況の変化であることが多く、それはDryのいう文と文の論理的関係からくる明確な状況の変化とFleischmanの構想展開上の規準にもあてはまる。そのためか、音量的にも強調されていることが多く（サンプル2の27、28と31、32も参照）、10と12の節もこのナラティブの展開に不可欠である。ただし、12は表面的には2つの節であるが、意味的に埋め込み文と同等（つまり、I found that 以下）と考え、一つのナラティブ節として表示した。10と12の間の11は、それまでもくり返されている情報で、状況の変化を表していない挿入的な節なのでオリエンテーションとした。続いて、13ではまたタラ節が現れるが、これは発見ではなく、また、時間的規準も満たしていない。むしろ時間的には、停滞したまま、6～12までの出来事がまとめられている。このような節を、Fleischmanは「まとめの結果節（summative result clauses）」とよび、制限節の一種としている。その後続く14と15はほぼ同時に起こった出来事で、お互いの順番を変えても事実は変わらないので、等位節として処理した。次に問題となるのが、16のタラ節である。16と17の関係は、相談の直前の助詞が「と」でなく「に」であることから、「医者に尋ねた」(16)、そしたら「医者が17といった」(17)という関係にあると思われ、両方とも時間的規準にも合致したナラティブ節となる。その後は、18において再度子猫を飼うことをあきらめた途端、猫に変化が起きる様子が、19～21にかけて描かれている。ここでは、18と19、19と20間には時間的な規準が適用できるが、20と21間には適用できない。しかし、20と21はお互いに順番を変えても事実上支障をきたさないので等位節であると考えら

れる。そして、最後に22で話し手が猫の一連の状態や行動に対して、洒落を用いて評価をするところがこの話の「落ち」になっている。

凡例：1～22= 節番号、F = free clause, N = narrative clause, R = restricted clause, o = orientation,
 c = complicating action, r = resolution, e = evaluation
 網かけ=移動可能な距離（時間的に重なる範囲）

表1

	F	F	F	F	N	R	N	N	N	N	F	N	R	N	N	N	N	N	N	N	R	
1	o																					
2		o																				
3			o																			
4				o																		
5					c																	
6						o																
7							c															
8								c														
9									c													
10										c												
11											o											
12												c										
13													o									
14														c								
15															c							
16																c						
17																	c					
18																		c				
19																			r			
20																				r		
21																					r	
22																						e

前頁の表1は、このサンプルデータの分析結果を見やすいように表にしたものである。この表を見ると、全体的な構造や個々の節の種類、それらの置換可能な距離を一度に把握できる。この表を作成しながら、Labovのいう置換可能性とは実際どういうことを指すのか考えさせられた。一つの問題は、どこまで日本語や話の流れとしての自然さを考慮に入れるべきなのかという点である。例えば、英語においては、主節と従属節は構造的に置換可能であるのに対し、日本語では、構造的に従属節が普通、主節の前にしかこないため、接続によっては、移動させると不自然な日本語になってしまう。特に「たら」は、時間的な順序に厳格な接続助詞であるらしく、接続助詞の中でも、特に不自然に感じられる。第二に、節の位置を変える場合、移動させる節だけでなく、移動先も含めて、どの程度言語的な操作が許されるのかという問題がある。それ如何によっては移動距離が変わってくる。例えば、サンプル1の11「かわいい顔してるんだけど」などは、このままの構造では移動距離は12までであるが、「かわいい顔してる」という情報の内容面から考えるとこの話全体に有効である。そこで、ここでは、実際に節を移動させることよりも、その節の情報が他の節と時間的にどのように重なるか、という内容的な観点から移動可能性を捉えてみた。次のサンプルデータ「ハワイでの話」では、またいくつか違った問題が浮上してくる。

分析サンプル2：ハワイでの話 (注2)

<u>話し手</u>		<u>聞き手</u>
1 あの一ちょっと毎日日本放送で朝ラジオやってんですよ。	ORI	はいはい
2 そーれでね、もう海外旅行とか行かれなくなっ、ちゃってね。		あっ そうか
3 それが ま 一ちょっとねー 帯でやってるんで。		うんうん
帯でやっているつつつても、	(JOKES)	
和服きてるんじゃないですよ。		わかってるわかってるわかってる
ほいでねー		[うん、まわしたりしてね。
もう一あの一		黒帯でくるくるくる
@@@@		あー殿おやめください
ぴっ！(吹き矢を吹くまね)		(死んだふり) @@@@]
4 ほれで、あの一@@一年くらい前に一その始まる前に、		
5 ハワイがやっぱ好きなんで、		
6 自分の、ま、ちっちゃいんだけどね、		
7 コンドミニアムがあるわけ。		かつこいいー
8 ほろほろなんだけど。		
9 でもねーでも最後に思い出にもうどっぶり行っとう		
と思つて。		うん。
10 で、みんないく？いく？つたら、		
11 <u>だれもいかないの、そんな時。</u>		

- 12a それで、一人で行ったの、ハワイ。
うーん。]
でも、いいやと思って行って。 COMPLICATION [あっ、暫く行けなく
なっちゃうから
- 13 大体私は、ハワイに着いたら、 REPEAT 12
- 14 空港からタクシー行って EMBEDDED ORI
- 15 自分の部屋行って。
- 16 そしたら、まああったかいなーって、
- 17 ハワイの気候になれるまで、 はい
- 18 お掃除を、部屋して、
- 19 ほいで、タオルとか汚れるんで、
- 20 着てきたものも脱いで、
- 21 その汚れたタオル入れて、
- 22 シーツも入れて、
- 23 洗濯をするわけ、まず。 うん。
- 24 それで、洗濯がガーッと回ってる間に、
- 25 友達なんかに電話して、
- 26 ハワイだなーってだんだんこう馴染んでくるわけ。 うれしいね。
- 27b そいで、洗濯んところまで、洗濯機まで行ったら、
- 28c 洗濯機がこわれてたの。 (coordinated clauses) 何だって。
- 29d お水がポアーっと出て、
- 30 ウワーっと思って、 EVALUATION
- 31e 友達に電話しようと思ったら
- 32f 電話も切れてたの。 何で。
- 33 ほれで、どうしよう。何にもできないと思って、 EVALUATION
- 34g アラモアナショッピングセンターまで行って、 @@@
- 35h で、うんと「Can I get the bicycle?」 @@@
- 36i で、自転車を買いました。 ほう。
- 37j ほいで、自転車で行って、
- 洗濯機あっちゃ (false start)
- 38k 洗濯機売り場の男がこれかっこよかったの。 @@@あっ、八重歯生えて
××さんみたいな。
- 39 そして、もう一気に今までの苦労がもううー最高のバカンス。 EVALUATION
(手を机で打つ) [今、痛かったでしょ。@@@
すごい痛かったの。 @@@@@]
- 40 それで、その男の子があの一持ってきてくれるわけ、家に。 EMBEDDED ORI おっ、デリバリー。
- 41 おー、で、まずーその洗濯機を - あのを壊れ 一分前だけど大丈夫かな。
壊れてるんだったら直すと、 うん
いうんで、
- 42i 家に調べに来たの。

43m	そしたら、「壊れてるからじゃやっぱり売り場のとチェンジする」って、 「ほくが持って行きます。」	うん
44	かっこいい。	EVALUATION
45n	全部もってった。	ほう。
46	ほいで、もう私汚かったんで、	EMBEDDED ORI
47	<u>やだー来るわー</u> と思って、 ↑	EVALUATION
48o	一時間ぐらいの間化粧して、 ↑	(coordinated
49p	<u>ムンムン</u> に着替えて、 ↑	clauses)
50q	こうやって待ってたら、 ↑	はい
51r	おじいさんが来たの。 ↓	RESOLUTION @@@@

このサンプル2のデータは、オリエンテーションで今の話し手の状況が語られるところから始まる。この1～3の状況は、時間的には、ナラティブ内の出来事と隔離しているが、話の筋としては、4から11までのハワイに行く事情や行くまでの状況に繋がっている。そして、このナラティブの物事が実際に動き始めるのは、12からである。その後、すぐにいつもハワイに行ったら何をするかという習慣的な出来事の描写が13～26まで続く。これらの習慣的な出来事はいかにその中で時間的な経過に沿って描かれていても、ナラティブ全体の骨格として、一本の時間軸上にないのでナラティブ節とは認められない。しかし、その一方で、その習慣的な行為が今回もその途中までは（少なくとも13～22までは）くり返されたに違いなく、ハワイへ出発してから次の27のナラティブ節につながるまでの出来事を、時間的な経過と共に同時に紹介しているという点では、技巧的なオリエンテーションとなっている。

そのオリエンテーションに続いて、今度は「発見のタラ」が27～32の間に二回起こる。これらは、どちらも偶発的な出来事で、前回のデータと同様の理由で、27と28、31と32をナラティブ節として認めた。ただし、28の洗濯機の故障の発見は、洗濯機の水の出方が異常なことから見つかったと思われ、時間的には29が先であるが、微差で、入れ替えても事実は変わらないので28と29を等位節とした。また、サンプル1の12のように、28と29を発見の内容という一つの節として考えることもできると思う。また、30と33はそれぞれのアクシデントに対する話し手の感想であるので、評価であると考えられるが、特に33の場合、34以下の出来事の方角付けの役割も果たしていると思われる。次に、問題になるのがナラティブ節34～37の後に続く38の節である。37と38は文としてつながりがあまりよくない上、二つの節の間には、言い直しの痕跡があり、話し手が、話の展開に適切な構造の選択に失敗している可能性がある。一つの代替案としては「発見のタラ」を用いて、「ほいで、自転車で洗濯機売り場まで行ったら、洗濯機売り場の男がこれかっこよかったの。」という文が考えられるのだが、37は、タラ節ではなく、テ形接続である。それにもかかわらず、38が予想外の出来事として感じられる大きな理由は、38は表面的には状態性の文で、男性の容姿の描写でありながら、かっこいい男性に出会うという出来事

を前提としているからだと思われる。また、そこには、不運なアクシデントの最中に幸運な出来事が起きたという、状況の変化も感じられるのだと思われる。その証拠に、39の評価節では、38の出来事のために、話し手の気分が一気に最高になっていることが表現されている。また、38は、すべての節の中で最も話し手により強調された節であり、まずこの節なしには話自体が今後展開していかない。そのため、ここでは38をナラティブ節として分類した。40以降の節では、まず、40、41と事情説明的なオリエンテーションの節が続いた後、44では、43と45の男の人の言動に対する話し手の感想、評価が差し挟まれるが、42、43、45と時間軸に沿って出来事が語られる。46から先は、話の結末である51の「落ち」に向かって再度盛り上がる部分である。まず、46は話し手のその時の様相が背景として語られた後、47で再度その男性が訪れることに対する気持ちが語られ（評価）、それから、48、49と等位節のナラティブ節が続く。一方、次に続く50の「こうやって待っていたら」は、次の節の行為によって、その持続的な行為が止むという性質を持っているため、サンプルデータ1の6と同様、ナラティブ節ではなく、制限節である。しかし、50はオリエンテーションではなく、このような節をSchiffirinやFleischmanはコンプリケーションとして分類している。これらの相違点は、データ1の6の場合、5と6の間で場面の設定が変わっているのに対して^(註3)、データ2の50の場合、47から51まで場面設定が変わることなく一気に一連の行為が受け継がれている点である。また、データ2の50の場合、「待つ」という行為が48や49と同様、「落ち」に向かうために鍵となる助走行為であるのに対して、データ1の6は背景的な情報であることも関係していると思われる。

4. 結論とまとめ

以上、Fleischmanのモデルをデータの分ち書きの段階で、日本語の構造にあわせた修正をして適用してみた結果、ナラティブ節の規準に次のような問題を感じた。

まず、最も基本的な時間的な規準であるが、ナラティブの話の進み方は、Labovらの説明のように個々に完結性の高い動詞だけで、過去から現在に向かって一直線に語り継がれるわけではない。それは、むしろ、時間的にも等間隔ではなく、多少重なりあったり、繰り返されたりしながら、意味的にも比重の違った言葉が結ばれて前に進んでいく。このような現実に対し、Fleischmanは、「マス動詞 (mass verbs)」や「プロ動詞 (project verbs)」といった、一つの動詞で、繰り返される行為をまとめられる動詞や様々なタイプの行為が含まれる動詞を設定したり、いくつかのナラティブ節を回顧的にまとめる「まとめの結果節(summative result clauses)」を設定したりしている。しかし、これら以外にも、繰り返しやナラティブ節を時間的に先取りしてまとめる節もあり得る。これらの節をどのような種類の節として分類すべきかは、今後の課題である。また、話の出来事が前にすすむという感覚は、Dryの言うように、動詞だけの問題ではなく、節と節の論理的な関係に因るところも大きいことが「発見のタラ」やサンプル2の38に観察された。興味深

いことに、これらの節は、常に構想展開上の規準によっても説明できたが、常に同時に説明できるのか、今後さらに検証を重ねていく必要がある。

次に、言語学的規準は、日本語の場合は「タラ」を中心に、従属節でもナラティブ節として認められるケースがあり(9例中4例)、構造的にも置換不可能であったため、ナラティブ節の絶対条件としては認められなかった。そもそも時間的規準に合致した従属節がLabovらによってナラティブ節として認められなかったのは、英語において従属節が構造的に置換可能だったからであり、英語においても時間的規準に合致した従属節が、ナラティブ節として認められている現在、言語学的規準は、やはり意味がないと言える。また、この言語学的規準は、置換規準の構造的な面と表裏一体であり、言語学的規準が否定されるということは、置換規準の構造的な面が否定されるということでもある。

最後に、その置換規準についてであるが、日本語では、従属節の構造的制約から、その移動に際し、どの程度日本語としての自然さや話としての流れの自然さを考慮すべきなのかという点と、移動させる節や移動先の節の言語的構造をどの程度変えてよいのかという点の二点に関し、明確にされる必要があることを指摘した。実際に移動させる以上は、最大限、日本語としての自然さや話の流れは尊重されるべきであろうし、また、そうするには、言語的操作が必要となってくる。一方、本研究で暫定的に用いた置換規準の内容的な解釈は、その節内の情報が時間的にナラティブのどの節まで有効かというものであり、この解釈は、今度は時間的規準と表裏一体であると言わざるを得ない。つまり、この解釈では、置換規準すらもその存在価値を失ってしまう。今後、実際に節を移動させることが節の認定において必要なかどうかも含めて、再度、置換規準の存在を検討する必要があるだろう。

おわりに

このようなモデルにめぐりあうと、話し手が、このモデルのように、常に構造的に意識しながら自分の経験談を語っているか、という疑問がわき起こる。それは、我々が、話している本人ですら時々途中で何を話しているのかを見失ってしまうことから、必ずしもそうではないことがわかる。そういう意味では、このモデルは理想型であり、このデータの話し手たちは、話し上手である。しかしながら、口頭でしかも、その場で組み立てられる話というのは、書かれたり、十分事前に練習されたスピーチなどと違い、常に不完全なものである。にもかかわらず、我々が、大体において話し手に何が起こったかを理解することができるのは、たとえ話し手が言い間違えたりや言い忘れてしまっても、常に聞き手との共同作業で話が構築されていくからであろう。聞き手は、不明な箇所を問いただしたり、意味を推測して付け加えたりしながら、その作業に参加している。今後は、より多くのデータを分析することで、さらにこのモデルの日本語ナラティブ分析における有用性とそのあり方を探っていききたい。

〔注〕

- (1) ただし、英語において関係代名詞の修飾節が一つの節として分かち書きされるのは、その情報の流れ方や構造的な位置の条件からも理屈に合っていると思われる。特に、関係代名詞の非制限用法などは、付加的な情報であり、単独の節としての条件を備えている。
- (2) 表2は、サンプルデータ2の分析結果を見やすいように表にしたものである。このサンプル2のデータでは、1～11と13～26は全てオリエンテーションでかつ自由節であるので、紙面の都合上、その部分の表は割愛した。

表2

	N	N	N	N	R	N	N	R	N	N	N	N	R	R	R	R	N	N	R	N	R	R	N	N	R	N
12	c																									
27		c																								
28			c																							
29				c																						
30					e																					
31						c																				
32							c																			
33								e																		
34									c																	
35										c																
36											c															
37												c														
38													c													
39														e												
40															o											
41																o										
42																	c									
43																		c								
44																			e							
45																				c						
46																					o					
47																						e				
48																							c			
49																								c		
50																									c	
51																										r

(3) サンプル1の5と6の間で場面設定が変わっていることは、次のような観点からも説明できるのではないか。

- ① 時間的副詞：サンプル1は5、6両方とも「ある時」という時間指定があり、2つの場面は、時間的に離れていることがわかる。サンプル2は時間指定なし。
- ② 接続の種類：サンプル1は、5で文が終止形で終わって、6で「ほしたら」という接続詞で結ばれている。サンプル2は49と50がテ形接続。
- ③ 主語： サンプル1は、5が話し手の娘で、6は話し手で主語が違うのに対し、サンプル2は49、50とも話し手。

〔参考文献〕

- Dry, Helen. 1981. Sentence Aspect and the Movement of Narrative Time. Text, 1, 233-40.
- Fleischman, Suzanne. 1990. Tense and Narrativity: from Medieval Performance to Modern Fiction. Austin :University of Texas Press.
- Fludernik, Monika. 1991. The Historical Present Tense Yet Again: Tense Switching and Narrative Dynamics in Oral and Quasi-oral storytelling. Text 11, 365-97.
- Hopper, Paul J. 1979. Aspect and Foregrounding in Discourse. Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax, ed. by Talmy Givon, 213-41. New York : Academic Press.
- Labov, William. 1972. The Transformation of Experience in Narrative Syntax. Language in the Inner City. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- _____, and Joshua Waletzky. 1967. Narrative Analysis: Oral Versions of Personal Experience. Essays on the Verbal and Visual Arts, ed. by June Helm, 12-44. Seattle: University of Washington Press.
- Reinhart, Tanya. 1984. Principles of Gestalt Perception in the Temporal Organization of Narrative Texts. Linguistics. 22. 779-809.
- Schiffrin, Deborah. 1981. Tense Variation in narrative. Language. 57.45-62.
- Silvia-Corvalan, Carmen. 1983. Tense and Aspect in Oral Spanish Narrative: Context and Meaning. Language 59, 60-80.
- Szatrowski, Polly. 1985. The Function of Tense-Aspect Forms in Japanese Conversations: Empirical and Methodological Considerations. Ph.D. Dissertations. Cornell University.
- Thompson, Sandora. 1987. Subordination and Narrative Event Structure. Coherence and Grounding in Discourse. ed. by Russel Tomlin. 435-54. Oregon, Amsterdam: John Benjamins.